

詩を楽しもう

第一次指導と第二次指導混交 (1/2)

目標

・ 工藤直子さんが、野原の仲間になりきって生まれた詩の面白さを味わおう。

○ 準備 (教科書と鉛筆一本 ノート) <区画> 前文と各詩の七区画

一 よむ (音読 七名)

○ 席順に、大きな声でゆつくりと読む。読後、読み手と聞き手を評価する。

二 とく (読後感整理と本時へつなぐ話し合い)

○ 題目 (教材の輪郭を確認する)

・ 題名「のはらうた」を手がかりにこ

◎ りらの詩の作者 (動物・植物・自然) ひびき (この詩の生まれを予想する)

・ 作者と題名の対応の面白さ

・ 「池・小川・切り株」の種を予想

○ 手引き (視写の指示)

・ 前記の三詩を視写

三 よむ (手引きに従い黙読)

四 かく (視写 教師も板書 工夫して)

略 板書事項参照

○ しっかりと書きりと視写

○ 机間巡視して書きぶりを確認し評価

五 よむ (全員 指黙読 指音読 各一回)
六 とく (視写部分について話し合う)

○ 語義 (難しい語句の解消)・区分

・ わたし おと はやと ぼく
いつか きつと くすぐる くらし
わし どっこいしょ

◎ 心 (詩を深く味わう)

・ 何の音 お手伝いは いろいろ
その音を楽しんでいるのは誰
くすぐるのは誰 小川の水の動きは
勢いが詩を生んだ (飛躍がある)
・ ここで暮らしているのは誰
この暮らしに満足 (飛躍がある)

七 よむ (全員で黒板の詩を指音読)

・ 暗唱 (時間があったら)

<板書事項>

住人 声

のはらうた

7	6	5	4	3	2	1
きりかぶ	おがわ	からす	かまきり	すみれ	いけ	仲間たち
植	○	動	動	植	○	
くらし	うみへ	ぼくは	おれはかまきり	おと	ひるねのひ	

おと

いけしずこ

ぼちゃん ぼちよん

ちゅび じゃぶ

ざぶん ぼしや

びち ちよん

ざざ だぶ

ばしゅ ぼしよ

たぶん ぶく

ぼつ どぼん・・・

わたしは おとがする

いろんな

うみへ

おがわはやと

ぼくは きつと

いつか

うみを

くすくつてやる

くらし

きりかぶさくぞう

わしは

いちにちじゅう

「どっこいしょ」を

している

第一次指導と第二次指導混交(2/2)

一 よむ (音読 七名)

二 とく (復習と本時へつなぐ話し合い)

○ おさらい (前時の復習)

・ 静かな池で生まれた詩 音楽会に

・ 小川から元気な男の子の声 面白い

・ 切り株からは誰の声 野原の番人だ

◎ 承接 (前を受けて本時につなぐ)

・ 季節が分かる詩 春は誰の目から

・ 夏は誰の活躍する季節

・ 自分に自信が出て元気になった

○ 手引き (視写の指示)

・ 前記の三詩を視写する。

三 よむ (手引きに従い黙読)

四 かく (視写 教師も板書 工夫して)

五 よむ (全員 指黙読 指音読 一回)

六 とく (視写部分について話し合う)

○ 語義難しい語句の解消)・区分

・ かげろう すみれいろ ひがながい

・ ところとろ かま ふりかざす

・ きまつてるぜ いろつきのはね

・ うたえたら も でも とんで

・ 各詩 二区分

◎ 心 (詩を味わう)

・ ひるねのひ

・ どんな春 どんな気分に 私も

・ かまきり

・ サングラスが似合う 誰の心にも
ぼくは ぼく
カラスだけかな 共感ないかな

七 よむ (全員で黒板の詩を指音読)

暗唱 (時間によって)

〈板書事項〉

おと 池の音楽会

うみへ 元気な子

くらし がんこ者

ひるねのひ

すみれほのか

きょうは あたたかい

かげが やさしいね

ちようちよ とんでるよ

ありも あるいているよ

かげろうが ゆれているね

ひるね したくなる

すみれいろの ゆめ

きつと みられるね

ひるねから さめて

せのび してみれば

まだ ひがながい

ところとろと はるのひ

おれはかまきり

かまきりりゆうじ

おう なつだ

おれは げんきだ

あんまり ちかよるな

おれの ころも

どきどきするほど

ひかっている

おう あつい

おれは がんばる

もえる ひをあびて

かまを ふりかざす

わくわくするほど

きまつてる

すがた

ぼくは ぼく

からすえいぞう

ときどき ぼくは

ほんのすこし

いろつきの はねが ほしいなと

おもったりする

ほんのすこし

いいこえで うたえたらなと

おもったりする

でも

これが ぼくだと

とんでいく